



本堂の前に集合したお稚児さんと檀信徒の皆さん

形
満

復刊第七号

2009年12月

身延別院発行

〒103-0001

東京都中央区

日本橋小伝馬町3-2

Tel 03-3661-3996

Fax 03-3663-2766

第七百二十八回お会式法要に二十三人

お稚児さん

身延別院のお会式が十一月三日に開かれました。平成十九年に復活させたお稚児さん行列が今年も日本橋小伝馬町の一帯を練り歩き、法要に参列した約百二十人の檀信徒が日蓮聖人のご遺徳をしのびました。

お会式とは、日蓮聖人がおなくなりになられた十月十三日を中心に、全国各地の日蓮宗寺院、教会、結社で行われる、宗祖のご遺徳をしのぶ法会のことです。今年で七百二十八回を数えました。

身延別院では毎年十一月三日・文化の日にお会式を行っています。たくさんのお稚児さんを迎えるために、お寺ではお会式に向けて万灯を準備したり、ピンクと白の薄紙で作った花を本堂内に飾ったりと少しずつ準備を進めてきました。また、地域の人々にも親しまれるようにと、二年前からお稚児さん行列を復活。今年は檀信徒の子どもさん、お孫さんら二十三人がお稚児さん行列に参加すると申し込みがありました。

お会式の当日、お稚児さんたちは、彩りも鮮やかな衣装に身を包み、顔もきれいに化粧をし、午後一時に家族とともにお寺の前を出発。小伝馬町交差点から本町三丁目交差点へ、そして再びお寺へと約八百メートルの道のりを、お題目と団扇太鼓の音に合わせて練り歩きました。かわいらしいお稚児さんの姿に、街を歩いている人たちからも注目が集まりました。

本堂の前でお稚児さんとその家族が記念撮影を済ませた後子どもさんの健やかな成長を願うお加持が厳かに営まれました。参列したお稚児さんの一人、飯田伽楼羅(からら)君(五歳)が日蓮聖人のご遺徳をしのぶ祭文を読み上げると、檀信徒の中から拍手が沸き起こりました。(平山)



第七回 山梨県早川町・十萬部寺

妙法両大善神を祀る

車一台がやっと通れるだけの道幅。ハンドル操作を誤ったら崖の下へ真っ逆さま。コンクリ



十萬部寺の清水住職と奥様

ト舗装されているとはいえず、枯葉や枯れ枝、落下してきた小石などが散乱し、心細くなるばかりでした。山梨県早川町の奴多山十萬部寺(ぬたさん・じゅうまんぶじ)を訪ねた時のことです。

身延山久遠寺を参拝してから七面山へ向かう場合、今では国道を経由し、七面山の登山口まで乗用車で向かいますが、以前は身延山奥の院から西へ下り、赤沢という集落を経て白糸の滝に至り、そこから登り道となる徒歩のルートでした。十萬部寺はこのルート上にある由緒のあるお寺。日朗上人を開山とし、身延山の鎮守神である「妙太郎」「法太郎」の妙法両大善神をおまつりしています。

話は変わりますが、今から十年以上も前の一九九六年八月、私は新聞紙上で「お坊さんがんばる」という連載記事を担当しました。現状を打破すべく、各地で奮闘しているお寺の住職を五回にわたって取り上げた記事でした。その中で、清水本尚さん(掲載時五十四歳)という日蓮宗寺院の住職を取り上げました。過疎化が進む山梨県早川町で、一人で六か所の住職を兼務して奔走する姿を伝えたのです。その当時、私はまだ法華経の教えに目覚めていませんでしたので(!?)取材したこと以上に特別の関心を持つこともなく、清水住職との関係もそれきりになっていました。

ところが今、日蓮宗寺院の千か寺参りをするようになり、かねてより訪ねてみたかった山梨県の十萬部寺を調べてみると、住職が清水本尚



さんだったのです。電話をすると、奥さまが出られて、私が書いた記事のことも覚えていてくれました。「車ですぐに来られますよ。どうぞご参拝ください」と言ってくれました。

さっそく出かけたところ、冒頭のような山道を進むことになったのです。悪戦苦闘の道のりも、二十分ほどもするとお寺の境内となり、清水住職と再会を果たすことができました。

「ものすごい道で、心細くなりましたよ」と私が話すと、「初めての人には、たいへんな場所にあることを伝えます。でも平山さんなら、強い意志で来られると思ったので、何も説明しませんでしたね」と奥さまは笑いました。

不思議なもので、帰りは道幅も広く、穏やかに感じられました。

(平山徹・新聞記者)

べっ たら市に初出店

青年会

町会の協力を得て

身延別院青年会が十月十九、二十日、東京・日本橋本町の宝田恵比寿神社を中心に開かれる「べっ たら市」に初めて参加し、「揚げたこ焼き」の店を出しました。

べっ たら市は江戸時代中期から続いている伝統の行事。宝田恵比寿神社の門前で、毎年十月

二十日の恵比寿講にお供えをするため、前日の十九日に市が立ち、野菜や魚、神棚などが売られるようになったことが起源と言われています。中でも浅漬け大根のべっ たら漬けがよく売れたことから、べっ たら市と呼ばれるようになりました。この二日間は、現在もべっ たら漬けをはじめ、お好み焼き、焼きそば、カステラなど三百軒以上の露店が並び、たくさんの人でにぎわいます。

青年会は、身延別院檀信徒の関係者である大伝馬町一之部町会長の石倉知之さんらのご尽力で、人形町通りに近い一角に店を構えました。藤井教祥副住職を中心に青年会のメンバーが前日に材料を調達。十人が交代で店に詰め、道行く人に「おいしいですよ」「いらっしやいませ」と声をかけ続けました。たこ焼きはお客さんの前で、油でカリツと揚げ、たっぷりのソースをかけて販売。七個入り四百五十円でした。

十九日よりは二十日、昼間よりは夜になって売り上げを伸ばし、二日間で約三百五十食分の売り上げがありました。収益は約一円で、子育て支援活動に充てます。メンバーは「初めての出店にしてはよくやった」と話していました。

ご協力いただいた檀信徒の皆さんありがとうございました。

バザーの品を募集

青年会ではフリーマーケットで扱う品物(新品)を引き続き募集しています。青年会は、東京都江戸川区で今年四月に開催されたフリーマーケットに初めて出店。檀信徒の皆さんのおかげで、子育て支援のための活動費に収益を充てることができました。今後もフリーマーケットへの出店を予定しています。



揚げたこ焼きを売る青年会のメンバー



お客さんに「おいしいですよ」



開店前の朝の打ち合わせ



手作りの看板

寺の動き

久遠寺のお会式を団参

身延山久遠寺のお会式が十月十二、十三日に営まれ、身延別院から藤井教祥副住職、河野信成師、檀信徒の皆さん計七人が団体参拝しました。一行は十二日午前十一時半に小伝馬町の別院を出発。身延山には午後三時に到着しました。午後六時から祖師堂で営まれたお遠夜法要に参列しました。

境内は五重塔がライトアップされる中、ふだんと違って万灯が飾られるなど、お会式ならではの華やかな雰囲気でした。一行は西谷にある岸之坊に宿泊し、翌十三日は午前六時から本堂と祖師堂で営まれた朝のお勤めに参列しました。御廟と奥の院を参拝し、午後零時半に身延山を後にしました。



繰り出した万灯とライトアップされた五重塔



久遠寺を訪れた檀信徒の皆さん(奥之院思親閣で)

お会式の花作り奉仕

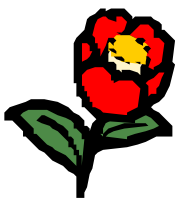
身延別院の檀信徒の皆さんが十月十九、二十日、お会式の花作りに取り組みました。お会式では毎年、本堂の内外にピンクと白の薄紙で作った花をたくさん飾りつけます。その花をみんなで手分けして作り、竹や万灯にくくりつけるものです。作業は地下ホールで行われました。

今年も青年会のメンバーが、十九、二十日に開かれた「べつたら市」に出店したため、花作りの場に副住職らの姿はありませんでしたが、精鋭部隊が例年通りに花を作りあげました。お

手伝いいただいたのは以下の皆さんです。林好江、阿久津喜美子、石田光子、石渡日出子、上遠野美津子、黒石鈴子、勝見登志子、小林聡子、岡本春雄、岡本つね子、加藤和恵、丸山定子、杉山尊子、小島喜恵子、今井善子、飯田望、有澤文子、三和家政婦紹介所、ケアネット三和、(有)三京、工藤祐子、辻野幸子(敬称略)。ありがとうございました。



お会式の花作りをする檀信徒の皆さん





質問

人の死後、四十九日とか三十五日と言いますが、これは何でしょうか。



答え

四十九日については、人は亡くなると七×七＝四十九日経つと、必ず次の生を取る、という仏教の教理から来ています。人のなくなる瞬間を仏教では死有(しゅう)といい、生まれる瞬間を生有(しょう)といい、生まれる瞬間を生有と生有の中間を中有(ちゅう)といいます。これが最長四十九日間とされているのです。この期間は生前の業によって決まり、極悪人はすぐ地獄へ、極善人はすぐ天界にとかいうようになりますが、善業悪業拮抗している場合とか、業の積み重ねが少ない子供のような場合はなかなか決まらないといえます。しかし、どんなに長くても四十九日を超えないのです。人が亡くなって三日経つと、死者の意識が覚醒し、そこから中有の生が始まります。四十九日間の一週間

豆入れ奉仕のお願い

来年の追儺式(節分の豆まき)で用いる豆の袋詰め作業を、一月十九(火)・二十(水)日に行います。七センチ四方ほどの小さなビニールの袋に、盃一杯分ほどの豆を詰め、袋の口を折りたたみ、ホチキスで留めていく作業です。一時間でも二時間でも、都合のつく時間でかまいません。お手伝いいただける方、どうぞよろしくお願いたします。

仏教何でも質問箱

四十九日ってなに？



ごとに冥界の審判があるとか、あるいはさまざまな仏菩薩が現れて解脱への導きがなされるともいいます。

この期間は眼に見えない意識によって生じた肉体を取り、神足通といって思いのままにどこへでも行くことができる『俱舍論』という論書にあります。

この中有は四十九日の間に、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天の六趣の境界いずれかに生まれ変わるか、あるいはその期間の間に解脱して輪廻の苦から逃れ、仏国土に赴くとされています。私たち『法華経』の信奉者は、お経の一句一偈、お題目の一遍でも唱えたならば、仏の国土、永遠の安楽の世界、常寂光土へ赴くとお経に説かれています。その常寂光土とは、靈鷲山浄土にほかなりません。この娑婆世界の靈鷲山の上方の世界です。私たちの信仰は日蓮大聖人の導きによって靈山浄土へ往詣する信仰です。三十五日は五×七＝三十五で、二週間早めに区切って忌明けとするもので、あくまで四十九日が基本です。

秋季彼岸法要に五十人

身延別院の秋季彼岸会施餓鬼法要が九月二十六日午後一時から、本堂で営まれました。檀信徒約五十人が本堂に集い、提婆達多品などのお経を読誦しました。ご先祖をはじめ、ご縁のあった方々の塔婆をご供養しました。その後に住職から法話があり、終了後に地下ホールでご供養がありました。

今後の予定

一月 一日(金)～三日(日)

新年初詣、終日御開帳

十日(日)

中山荒行堂及び堀之内妙法寺初詣

今年度入行の荒行僧による御祈禱を受けます。

十一日(月) 平成二十二年度初十三日講

午後一時より

二月 三日(水) 節分会追儺式(豆まき)

午後一時より

編集後記

願満第七号をお届けします。今回は副住職の結婚式・披露宴の様子をお伝えするため、いつもよりも発行が遅れました。

お会式のお稚児さん行列には二十三人から申込をいただき、二十二人が行列に元気に参加しました。今号ではお稚児さん一人一人の顔写真を特集しました。笑顔あり、泣き顔もありました。ご覧になっていかがでしたか。お会式のお稚児さん行列は来年も予定しております。どうぞまたご参加下さい。

新型インフルエンザの流行、新政権の発足、身延山久遠寺五重塔の落慶法要など、様々なことがありました。身延別院でも副住職の荒行堂再行成満、青年会のフリーマーケット参加、次男・寛文師の僧道林入林など、いくつもの出来事がありました。来年も素晴らしい年になるよう、皆様と共に歩んでいきたいと思っております。次回は三月の発行を予定しています。(平山)